

立命電友会

「巡り合いと巡り合わせ」

（狭タイヘン）理事

配電機器事業部

上 條 保 彦（昭和三十八年卒）

研究開発部長



立命電友会会報への執筆のご指名を受けたものの、平々凡々とサラリーマン生活を送ってきた私にとっては特筆すべきこともなく、途方にくれましたが、諸先輩により苦労の末に設立して頂いた電友会に、この際、微力ながらお役に立てればと、「巡り合わせ」のよくなものを感じて筆を取らせて頂

いた所存でございます。

「巡り合わせ」と申しましたのは、私が立命館大学の門をくぐって以来、学生そしてメーカーのサラリーマンと人生を歩んでいく中で連鎖するかのよう展開する仕事の巡り合わせのようなものを感じるからであります。

現在、わが国を取り巻く環境は激変しています。東西の壁が脆くも崩壊し、いまや世界は単一市場化に向かって音を立て突き進んでいます。かかる激変時に世界の企業はグローバル化を推進して生き残りを図ろうとしています。一方、周知のように、わが国は明治の文明開化以来、西洋文化を吸収、応用して、世界に名立たる技術大国、経済大国を築いてきたわけであり

ますが、その陰で技術タダ乗り論が囁かれ揶揄されたりもしました。しかし、これからの時代にかかる見方をされていますと国際的に通用しなくなり、そんな風評は払拭すべきであります。

そこで、海外より良い技術を導入するとともに、逆にわが国から海外へ貢献できる、すばらしい技術を提供していく必要があります。そうすれば競争におけるアンフェア論は薄まり摩擦も回避できるかも知れません。立命館大学は建学以来、西洋科学文明の吸収と追うように燦然たる実績を築いてきました。私もこの立命館大学出の技術者の端くれとして、また今ではメーカーで研究開発部門を預かる身として、このような難しい局面を乗り切るための新技術開発に取り組む、少しでも海外技術供与に貢献できればと努力しています。

これが、私の言う「巡り合わせ」の第一であります。

また、こうした難しい環境下において、資源の乏しいわが国は技術立国を目指していかなければなりません。そこで色々と独創技術を開発するシステムが模索されています。と同時に学生の理工学部離れをどうしていくかという問題もございます。

その点、立命館大学は他大に先

駆け、産官学共同体制の構築を着々と進めているとお見受けします。例えば、理工学部の草津移転による敷地の確保、S Rに代表される研究設備の充実、また、ソフト面からはリエゾンオフィスの設置など数々の基盤が大学関係者、OBの方々及び地域のご尽力で整備されてきました。一方、電気電子工学科にも電子技術センターが開設されました。

これらの成果は、先刻の立命電友会会報でご承知の通り、また、電気関係四学会関西支部連合大会における大学、大学院生の数多くの論文発表に歴然としています。

る次第であります。そういう意味で本年は数年ぶりで電気電子工学科出身の人材を採用させて頂くことができました。これが私のいう「巡り合わせ」の第二でございます。

ご報告しておきたく存じます。

と申しますのは、仕事をなさうとするにはまず人と人との「巡り合い」というものが欠かせません。色々個性が融合することにより高品質で個性豊かな仕事ができるのだと痛感します。そして一つは人と仕事との「巡り合い」

しかしながら、先生方に伺いますと教員定員一本化によって研究分野の拡充は実現したものの、各教室の助手の人員が削減傾向にあり、円滑な研究活動に支障をきたしているともお聞きします。私も大学、学生の置かれたこうした状況を理解し、現在、メーカーの研究開発部門を預かる立場として大学、企業、ひいては国に貢献する、若い、次代を託せる可能性を導き出す活動を推進するために、少しでも協力させて頂ければと考え

です。私は、本来語学音痴でしたが、先述のように海外から超高圧変圧器技術を導入するために無理矢理(?)フランス語の受講を命じられ、遂には寝言にフランス語が出てくるまでになりました。苦手科目を何とか自分のものとし仕事で活かせることができたことは後日、私にとって大きな自信となりました。まさに人生一期一会、その時その時の巡り合い・巡り合わせを大事にしていくことが重要なのだと痛感します。

以上、堅苦しい話に終始して恐縮でございます。しかし、私は立命館大学が社会への貢献を目指し、それをサポートするものとして電友会員がその豊富な経験を活かして大学の研究活動に資するアイデアを提供していけば、そこに電友会の存在価値も大きくクローズアップされるものと期待します。そのためには電友会が親睦の場、学びの場、異業種交流の場と会員が自由に集える「巡り合い」の場になることが大事と考えます。会員諸兄も各自の立場で一つでもできることから実行していこうではありませんか。



新任のご挨拶

電気電子工学科

左 貝 潤 一

当びわこ・くさつキャンパスでは、大学のイメージとはかけ離れた端正な建物が立ち並び、周囲には緑が多く残されており、落ちついた環境のもとで教育と研究に従事できることを喜んでおります。

学内を歩いて見ると、建物の外観だけではなく、体育館の内部設備などでも充実しており、学生が勉強ばかりでなく、クラブ活動にも身を入れられるように配慮されている点に驚きました。エクステンションセンタという言葉を見つけたとき、最初は何のことか分かりませんでした。最初が、内容を知らず、学生の立場にたった施策があらゆる面で考えられており、立命館大学が歴史に安住することなく、常に時代に適応するため、あるいは時代を切り開くために、日々新しく変貌を遂げている様子が分かりました。私も何か新しい一ページを加えられるように、頑張りたいと思います。

私は一九七三年に大阪大学工学部の修士課程を修了し、日本電信電話公社(現在のNTT)武蔵野電気通信研究所に入所以来、ずっと

と基礎研究畑におりました。入社直前の一九七〇年に、半導体レーザがダブルヘテロ構造により室温で連続発振したことが報道され、科学朝日を購入して興味をもって読んだのをいまも鮮明に憶えています。また同年、光ファイバの損失が20dB/kmと、当時としては格段に低損失が達成されたため、光通信が話題になり、私もこの分野で研究をしたいと思ったのが、志望動機でした。運よく光通信を研究する中心の部署に配属されました。

光通信の研究室に配属されたものの、実は大学、大学院を通じて遠赤外分光の研究を行っていたため、光という共通分野ではあるものの、当然研究の中味が違うわけで、即戦力ではなく、将来よりの研究をするようになりました。このことをいまでも非常に有り難いことだと思っています。そういうわけで入社以来、かなり長期間にわたって単一モード光ファイバ・偏波光ファイバの伝送特性解析を中心とした基礎研究を続けることができました。博士論文も光ファイバに関するものです。

その後、電電公社が民営化されたに伴い、研究所内の研究内容が大幅に見直され、Research, Fundamental Development

Development が組織的にも峻別されました。一時期基礎研究所内で Pure Basic Research (PBR) という言葉がはやりました。この言葉はその後余り口にされませんが、民営化後、基礎研究所の研究はこの方向で進んできました。私も将来よりの研究として、位相共役光学などの基礎研究に従事しました。企業の研究所とはいえ、自由度の高い研究生生活を送れたことは幸せでした。

途中縁あって、東京大学先端科学技術研究センタで一年間客員助教授として、マルカティリ先生と共に研究をする機会を与えられました。大学卒業後にNTT以外で生活をするのはそのとき以来ですが、同じ大学ということで、そのときの経験が現在役に立っております。

学生時代には大学に奉職し、教える立場になるとは想像していませんでした。構内を往来する学生を見ていると、かつての自分の姿が昨日のことのように思い出されます。講義、卒業研究など学生時代を思い起こしながら、いままでのキャリアを活かして頑張りたいと思いますので、今後とも宜しくお願い致します。

「私を育てた立命館」

松 添 保 子

昭和三十二年卒

私が電友会事務局から原稿依頼の封書を受けたのは、日本の最南端、紺碧の海と珊瑚礁に囲まれた石垣島の仮住いでした。

阪神大震災で全壊した家の再建を待つ間、沖縄県から提供された被災者用住宅で、後始末の煩しさに疲れると、ゆったりと時の流れる南の島でリフレッシュする生活をしています。昨年の十月十五日、十六日に三十二電友会の還暦同窓会がありました。転送された封書を受けとったのが十月十六日で、丁度一年前の会合を昨日の事のように思いだし、母校への想いを改めて感じています。

私の思いだす母校は、訪れる度に発展を感じさせる立ち並ぶ学舎と大勢の学生の行き交う衣笠キャンパスでもなければ、新しいびわこ・くさつキャンパスでもなく、桜の花吹雪の散る古い木造二階建ての教室や渡り廊下で続く平屋の実験棟のほの暗さ、衣笠山につづく球場やグラウンドの夕もやなど、セピア色の映像となって脳裏に広がります。

こと志と異つていささか不本意

で立命館大学に入学した私でしたが、同級生が男性ばかりという環境には何の抵抗も気負いもなくすんなりと大学生生活に入りました。入学当時の理工学部は女子学生数三十人余ではなかったでしょうか。

電気工学科は私一人でしたから一日中女子学生に会わない日も多く、日によつては朝家を出かけてから帰宅するまで、一言も喋べらなかつたこともありましたが、通学に二時間近くもかかりましたが、別に苦にもならず結構楽しみな真面目に学んだように思います。当時の衣笠キャンパスは、勉学には絶好の環境でした。二回生三回生と進むにつれ級の中にすっかり溶けこんでいました。級に於てだけでなく、理工学部全体の雰囲気がそうだったので、女だからと云つた差別など不愉快を感じたことは、在学中一度もありませんでした。級友に保護されていたような気もするのですが、お陰様で出もつかず、四年間勉学の方も私なりに頑張つたと思います。

しかし、この四年間は多感な乙女？だった私にとつて相当なストレスの連続であつたのが正直なところでした。よくしたもので、このストレスに耐えるのが張り合いとなり、ストレスのある状況の方が心身共に元気に動けると云う特

技めいたものは、この大学の四年間に身についたものなのです。何一つ得意な学科も特技もない私にとつて、この特技めいたものは、社会に出てから踏んばるベースになりました。

小堀教授のお力添えで日本電器機材KKに入社し、第二研究室でコンピュータの定電圧電源装置の設計にたずさわりましたが、一年半後、特殊カメラの研究設計では知る人ぞ知る甲南カメラ研究所に移りました。大学で学んだ知識はメカニズムが主体であつた当時のカメラには殆ど役に立たず、メカニズムを初歩から学びながらのカメラ設計に悪戦苦闘しました。今市場に出まわっている使い捨てカメラの先駆となつた富士フィルム社の「写るんです」は私の手がけたもので、キャラメルカメラと名付けた試作機二台が手許にありましたが、一台は日本工業大学機械博物館に寄贈し、一台は阪神大震災でがれきの下になつてしまいました。撮影後カメラをフィルム毎回収し、フィルムは現像してユザーに、カメラ本体は外函とフィルムを新しくして再利用するという発想で、低コストで確実に作動し写りも良いカメラ本体を、発案者の甲南カメラ研究所長の故西村雅賢氏の指導をうけながら、設

計図をひきました。東京オリンピックを控えて経済が高度成長時代に入った時期で、カメラ本体のリーズの考えが消費は美德になりつつあつた風潮にマッチせず、陽の目をみていませんでした。時は移り、リサイクル、リーズの考えや、カメラが高級志向から記録の手段として一般化していった時代の中に浮上し登場してきました。街角でみかけると我が子に出会つたように思いますが、私の技術屋としての仕事の中で、唯一胸を張れるものとなりました。

手前味噌を書いてしまいました。が、双生児を宿しながら頑張れたのは、立命精神、古めかしい言葉で云えば立命魂があつてのことだと思ひます。社会に出てから、いわゆる一流といわれる国公立大卒の人達の中で、今こそ大立命館となつたものの、当時はさほどでもなかつた母校のネームバリューを逆に背負つたような意気込みで張り合つたのは、私がまだ若かつたからなのでしょう。

こと志に反して入つた立命館であつたのに、私は生粋の立命人になりました。私にとつて立命館は勿論学問の場ではありませんが、精神面で今の私の基礎を作つた最上のものであつたとはつきり云うことができます。

卒業後四十年近くになりますが、年を経るほどに母校を身近に感じるようになりました。昨年暮れの甲子園ボウルで、立命大パンサーズの優勝の瞬間、応援団のウェーブのうねりの中に居て、「赤き血潮」の大合唱に、立命ファミリイを実感しました。又、大震災の後、校友会兵庫支部から義援金を送つていただきましたが、被災間もない頃で落ち込んでいた気持ちに何かあたたかいものが流れこんだようでした。

そして今、プロ野球の日本シリーズをみています。古田選手は同窓生なのですね。捕手としてチームの頭脳であり、頼もしい打者でもある彼をみてみると、誇らしい気持ちになります。

立命の正確な意味は知らないのですが、命を立てるとは自分の命を最大限に生かしきる、力をだきつて生きることと私なりに解釈しています。この先も立命精神にのつつて生きたいと思つています。



雑感

— 電気磁気学からの

水平思考 —

オムロン フィールドエンジニアリング 九州(株)

一守 益 男

(昭和三十六年卒)

四十年前に四年間電気を学んだことは、その後のわたしのものごとの考え方に大きな影響を与えています。

それは、人間社会や精神の問題も、数学や電子と電磁気学に関する理論と方程式からの水平思考で解こうとする考え方です。ともに高校でも学びますが、この可能性を発見し試みるようになったのは大学をでてからです。

電友会から投稿依頼を受け長く悩んだすえ、いささか独断的なりますが、このことについてまとめてみることにしました。電友との酒の肴にでもなればうれしい限りです。

電子工学の基礎知識としての原子物理では、電子はこれ以上細分化できない無限小の粒子です。構造はボアの原子模型です。

この無限小とも考えられる原子と、これに比較すれば無限大と考えられる太陽系の構造は極似して

います。さらに、電子と陽子も太陽と衛星もともに同じニュートン力で支配されています。

このことから、わたしは早くから、

$$8 \equiv 1 - 8$$

と考えてきました。

$$0 \equiv \tan 90^\circ = -1 - 0$$

でも同じことがいえます。

この独断は、すでにわたしの哲学になっていきます。ついでに、すべてのものの形状は球であるとも考えています。このことを、すべてのことについての考え方の根拠にしています。

精神や社会現象は、多くの人が物理の世界とは異なるものと考えています。しかし、人は原子で構成され太陽系の中に存在する物体です。人が持つ精神的で社会的なものも、すべてこの物体とともに存在しています。したがって、わたしは精神も社会もこの例外でないと考えています。

地球上で二人が東と西に向かつて全く反対の方向に歩むと、地球の裏側で互いに向かつて歩いても、東西いづれに向かつて歩いても、その最終到達点の出発点になります。かつてのソ連の共産主義とアメリカの資本主義の考え方は、その方法論で東と西に向かつて歩んでいました。しかし、両者はついに

反対側の同じ地点でぶつかったのです。しばらくは一致の時代が続くでしょうが、いずれまたお互いに遠ざかっていくことになるだろうと読んでいます。逆に同じ方向に歩いていた日本とアメリカとの考え方の差の方が大きくなり問題となっています。

いろんな場面でいろんな議論をしてきました。わたしの哲学では、「正反対の意見は全く同じ意見である」ということになります。事実、徹底的に議論した結果の結論は同じであったことが殆どです。ともにブラジルに行こうとしているのです。西回りか東回りかの方論が異なるだけです。同じ仕事をするのにどちらが少ない力でできるかの効率に関する計算です。

力については、わたしは電気技術者らしく、そして最も簡単なオームの法則で考えています。

$$e = iR$$

この形をした方程式は、自然科学のみならず人間科学の分野でもよくでてくる方程式です。

$$W = eI = iRt$$

です。

会社の力は経営者や社員のポテンシャル (e) と、その使い方 (効率 R) で決まります。また、その力のできる仕事は、ポテンシ

ヤルと資本 (金 i) の積になります。資本が同じであれば、仕事はポテンシャルに比例し、ポテンシャルが同じであれば、仕事は資本の2乗に比例するものです。仕事の結果としての利益でも同じです。わたしは各種の経営数値や指標を、電気の V 、 i 、 R 、 t 、 C など

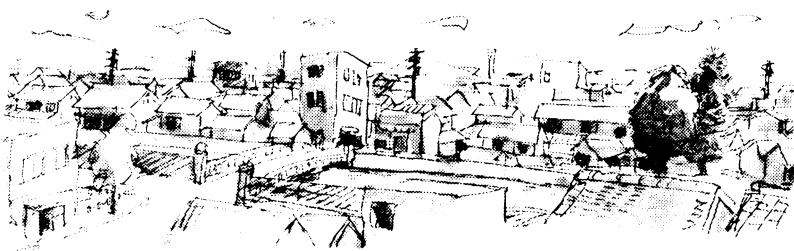
に置換えて水平思考し、各種の方程式で解いた結果を再度経営数値や指標に置換えています。無駄なことのようですが、電気の理論や方程式に置換えることで、人情などの雑念を排して問題を自然現象として冷静に考えることができ、

先も正確に読むことができます。このとき、特に電気で特徴的な位相 (交流) や過渡現象や共振現象の知識とともに展開をはかると、一見複雑と思われる社会や経済や精神的な問題も、時間の関数として明解に解決できることがあります。

他によく使うのは、電磁誘導と自己・相互誘導、分子磁石や誘電体分極、ヒステリシスなどの現象と理論です。

電気メーカーに就職し、前半二十年は電子機器の研究開発に携わってきました。その後は生産、海外事業、国際企画、監査、経営とだんだん電気から遠ざかっていきます。しかし、わたしは「遠ざかる

ことと近づくこと」は同じと考えて、ものの考え方は電気との関わりを益々強固にしています。大学での教科書、電気学会の「電気磁気学」は、わたしの哲学書です。電圧や電流を人の能力や資本に置換えてときどき読んでいます。いまになって何となく「電気磁気学」がわかるようになった気がしています。



辻村卒研との出会い

日満電気(株)

藤井力広

(昭和五十年卒業)

あれからもう二十年。この間母が亡くなり父も昨年他界。その一方で、妻と二人の男の子が我家の住民になり、私を除けばそっくり世代交代という事になりました。あの時、同じ辻村卒研を巣立った仲間達も同様に自らの時代を築いて活躍していると思います。

辻村卒研の同窓会は北区鷹ヶ峰の「然林房」でその第一歩をスタートさせました。それから毎年十二月に京都市内を点々としながらお互いの交流を深めてきた訳です。第十回目の年には鳥羽まで足をのばしたこともありましたが、まづ内藤君が結婚したのでに続いてバタバタと級友達の結婚ラッシュが相次ぎ、そしてベビーブームの到来。毎年の同窓会での話題も、各々の年令を感じさせる展開となりました。

あれから二十年。今では辻村卒研の同窓会も卒業年度の枠を越え大世帯に発展してきましたが、毎年の幹事担当諸氏の御苦労もさることながら、辻村・前田両先生の御活躍があるからこそと改めて敬

服する次第です。

ここで少し私事で恐縮ですが、自己紹介をさせて頂きます。私は卒業以来、大阪の中堅盤メーカの技術部に所属し、設計業務に従事しています。従って勤続二十年という節目を迎えている訳ですが、現在技術標準の取りまとめ、CADシステムによる自動設計の開発、新入社員教育や諸々の技術的問い合わせの窓口業務のようなことをしております。

配電盤メーカは主にビル・学校などの電設関係を主体にする企業と、特定の機械設備、工業用ロボットなどのメカトロニクスを主体にする企業とに大きく分類されますが、弊社の場合は前者に属しており、景気の変動が色濃く反映される業種の一つです。また受注形態から見れば施主・建築設計事務所・建築業・電設工事業・盤メーカというルートで仕事を請負う訳ですが、「見積り価格に対する取引価格の乖離」がかねてより大きなテーマとなっており、盤の製作に着手しているのに価格が決まらないという異常事態も見受けられるケースがあります。更に製作途中での仕様変更も日常茶飯事であり、これらの解決にむけて業界あげての取組みが強化されているところ です。

ところで私は辻村卒研の中で、「磁気増幅器による電動機の自動制御」というテーマを卒業論文の課題として、他の三名の仲間とともに実験を主体にしながら研究をすすめてきました。当時は多くの先輩諸氏が本紙でも書かれているように、実験設備は立派なものとは言いがたい状況で、例えば電動機の慣性モーメントを測定する時、電動機に巻きつけたおもりをやかにに入れて落下時間をサイクルカウンタで計測した事を今でも鮮明に覚えています。まるでガリレオの生きていた時代の話しのようですが、計測技術は進歩してもやり方の基本は変わらないものだと思っています。

また当時の私は、学生自治会の活動の中でも、理工学部ゼミナール運動にのめり込んでいたものでした。電気・電子工学がますます専門領域に分岐・深化する中で、科学技術史の学習を通して全体像を把握しておきたかったこと、あるいは現代の技術者が直面している基本的な問題点を知りたかったことなどが動機であったように思っています。

中小企業の技術屋として働く今の自分にとってこれらの「成果」がどう生かされているのか——改めて思い起してみると直接的な関

連性には欠けるものの、日々直面する問題に対して「物事の本質に立ち返って見直す」という教訓はそれなりに生かされていると自負している次第です。

「何事も本質を見極めて」ということは、一回生の時の電気磁気学担当であった辻村先生がよく強調されていました。もちろん他の先生方も同じ立場で教壇に立つておられる訳ですが、「頭で理解する」ということと「自分の腹におちる」ということの差はどこからでてくるのか——同じ体験をするにしてもその時の「運命的なめぐり合い」の中で、自分への影響力が決定される——これは一つの真理だと思っています。電気磁気学は電気工学の最も基本的な一分野であり、一回生の小集団教育として位置付けられていたことは非常に重要な点でありましたが、辻村先生の教えを受けたことが私にとって何にもかえりたい出会いであったと思います。まさしく一期一会という感じです。

理工学部の勉学条件改善運動の場面では、私は学生自治会の立場で、先生は大学側の立場でお互いの意見をたたかわせた事もありました。卒業後も毎年同窓会で顔を合すだけでなく、私の仲間まで引き受けて頂くなど、随分お世話に

なっています。(あの節は一生一大の失敗をし、大変御迷惑をおかけしました……)

さて、理工学部もびわこ・くさつキャンパスに移転し、新たな環境のもとで「辻村卒研のますますの御健勝を」とエールを送りたいところですが、辻村先生も本年度で定年退官されるとのこと。私としては二十年間続けてきた同窓会をこれからも続けていくことは勿論ですが、卒業年度を越えた大世帯をどう運営するか——皆で知恵を絞らねばなりません。

それはさておき、最近先生宅にも御無沙汰しておりますので、家族そろっておじゃまをさせていただきます! と思っております。大学を退任されても私達にとって生涯の先生であることにいささかも変わりありません。どうか今後とも奥様ともどもお元気で活躍されんことをお祈り申し上げます。

立命電友会事務局の皆様にも日頃の御苦労に感謝するとともに、本誌に寄稿の機会を与えてくださった前田先生にもお礼申し上げます。



電氣電子工学

教室だより

電氣電子系学系長

津田川 勝

教員の異動

次のような異動がありました。
(新任)

左貝 潤一

平成七年十月一日、N.T.T(株)より、電氣電子工学科教授に着任。

電氣関係四学会関西支部「准員のための講演会」の開催

電氣関係四学会関西支部主催「准員のための講演会」を平成七年十一月十四日(火)午後二時より本学びわこ・くさつキャンパスフォレストハウス六〇三号教室にて開催致しました。

このたびは、大阪府立大学工学部電子物理工学科教授の奥田昌宏先生を講師に迎え、「大容量記録ディスクの現状と将来」の題目にて御講演いただきました。当日は本学科教員ならびに約二百名の院生・学生の参加がありました。



同窓会便り

「還暦の年の同窓会」

三十三電友会

本年度は、私達三十三年卒同窓生の中の若い人も還暦を迎える年です。これを機に本年七月一日(土)に京都で同窓会を開催しました。私達は、卒業後、三十五年に一度は同窓会を開いていたのですが、前回の一九八八年以来、しばらく開いていませんでした。

今回は、同窓会の当日、午後にはびわこ・くさつキャンパスを見学し、夕方から京都木屋町通松原の「鮎鶴」で三十五名の出席者により賑やかに開宴しました。

東京から名古屋から、九州から広島からと、久しぶりの懐かしい顔も見られ、旧交を温め、近況や昔話にと、話は尽きぬ一日でした。私達三十三年卒業組は、少年時代は戦時中で、戦後の混乱期に青春を過ごし、また、日本の高度経済成長時代には企業の中堅として奮闘してきました。還暦を迎えた今、振り返ると感慨ひとしおです。平均寿命が八十歳を越えている現在、気持ちの上では引退することなく、しかし、今までのように張り切り過ぎないよう、健康に気

をつけて歩んでいきたいと思ひます。

母校の更なる発展と、三年後の再会を楽しみにして閉会しました。

(幹事 富森、岩永、山口、浦山、井上)



辻村・前田研究室OB会

恒例となっております年越し行事の同窓会が、本年は十二月九日(土)、京の宿 洛兆において開催致します。本年度は、辻村先生が御退官の年でもありますので、例年にも増して盛大に催す予定であります。御案内は既にお手元へ届いているかと思われませんが、もし、郵便事情等により不着の際には、至急御連絡下さい。又、名簿が不

完全なために御案内が届いていない方も、至急御連絡下さい。

連絡先〇七五五・一六六一・一一一

(内線 八五七三)

(本年度幹事 間野・水田)

院生の会

十一月二十五日(土)午後二時、立命館大学びわこ・くさつキャンパススイストウイング一階第五会議室にて、第五回総会を開催致しました。その夕刻、新しくオープンした立命生協新喫茶にて井上和夫教授をお招きして懇親会を催しました。また当日「院生の会会報を(第四号)」を発行し、会員皆様方に発送致しました。

(幹事 山崎 潔)

事務局便り

会報第六号の発行にあたり御寄稿いただきました皆様方には、心よりお礼申し上げます。同窓会の開催など本会に関わりのありますこと、随時御寄稿賜りますようお願いいたします。

また御連絡先等の変更がありましたら、事務局まで御一報いただけますようよろしくお願い致します。

(題字は久保之俊氏)

終身会費御納入のお願い

本会は、大学・教室・校友皆様方の相互の交流・親睦をはかるべく尽力致しております。安定した運営を維持・確保すべく、未だ終身会費御納入頂いていない校友の方々に對しまして、その御納入をお願い申し上げます。終身会費納入の主旨御理解の上、是非とも左記要領にてお手続き下さいますようお願い申し上げます。

(終身会費) 壹萬円

(会則第十五条に基づく)

(納入方法)

郵便局所定の振込用紙に卒業年、御芳名、御住所、電話番号、勤務先ならびに「終身会費納入」の旨を明記の上、最寄りの郵便局よりお振り込み下さい。

(振込先)

〇一〇六〇一九一七五〇〇三

立命電友会

(御問合先)

滋賀県草津市野路町一九一六

立命館大学理工学部

電氣電子工学科内

立命電友会事務局

(中西、津田川、高山)

電話 〇七五五・一六一・二六六二

FAX 〇七五五・一六一・二六六三